

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463329

研究課題名(和文)臓器移植看護における看護師の倫理的実践の変化 - アクションリサーチを用いて -

研究課題名(英文)Changes in ethical practices of nurses in organ transplant nursing - Using action research-

研究代表者

林 優子 (HAYASHI, YUKO)

大阪医科大学・看護学部・教授

研究者番号：50284120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アクションリサーチ(以下AR)によって臓器移植医療の看護場面で生じる倫理的問題に対して、看護師の倫理的実践がどのように変化するかを明らかにした。研究参加者は看護師、レシピエント移植コーディネーター、大学教員の15名であった。実施期間は1年間(平成27年10月～平成28年10月)であり、願いの明確化(1回)、実践を語る会(7回)、学習会(2回)を実施した。1回あたりの実施時間は約2時間。実践を語る会の記録とグループインタビューから得られた質的データをWordMiner1.5を用いて分析した。参加者はARが自己実践を見つめ直すきっかけとなり、倫理的実践への認知や行動に変化を示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to shed light, through action research, on how nurses' ethical practices change with respect to ethical problems that occur in nursing situations in organ transplant medical care. Fifteen participants were comprised of nurses, recipient transplant coordinators, and university faculty members. The research period was from October 2015 to October 2016, during which time the following meetings were held: clarification of desires(once), meeting to talk about practices(seven times), study meeting(twice). Each session lasted for about 2 hours. Using WordMiner 1.5 we analyzed the record of the meetings to talk about practices as well as qualitative data obtained for verbatim record from the group interviews. Through action research, participants had the opportunity to reflect on their own practices, and changes were seen in their recognition and behavior toward ethical practices.

研究分野：成人看護学

キーワード：アクションリサーチ 臓器移植看護 倫理的実践の変化 レシピエント移植コーディネーター 看護師

1. 研究開始当初の背景

臓器移植は、臓器提供者（以下ドナー）がいなければ治療は成立しない。臓器提供は、ドナーの善意と自発的意思によるが、臓器移植治療の対象者が、利害が対立する患者とドナーの二者であるところに臓器移植医療の倫理的問題が多く潜在する。臓器移植に関する社会的議論が行われていた 1990 年代から 2000 年初期では、臓器移植に携わるほとんどの看護師は、現場での倫理的問題に対して無関心で、自分たちには直接関係ないと考えていたことや、インフォームド・コンセントも看護師の立場でほとんど吟味されなかったこと、医師への依存傾向が強く受動的な対応であったことが報告されている。今日では、日本看護協会の倫理綱領の普及や学会での看護倫理に関する活動などにより、臨床現場や教育現場での看護倫理の関心は高まっている。臓器移植にかかわるレシピエント移植コーディネーター（以下 RTC）や看護師の役割も徐々に明確になり、患者やドナーを擁護するアドボケーターとしての役割や、レシピエントやドナーへの意思決定支援の重要性が認識されるようになってきた。しかし、臓器移植の現場では RTC や看護師が倫理的な看護場面に遭遇し、苦悩していることもわかってきた。RTC の倫理的問題に関する研究では、「ドナーの自律性の担保、意思決定の権利の尊厳、善行と無害の均衡、潜在的な強制力、情報提供の範囲など」についての倫理的問題が報告されている。RTC および看護師の倫理的苦悩に関する研究では、「移植の選択、ドナーの選択、移植のリスク、レシピエントの自己管理能力、家族の役割機能、価値観、レシピエント・ドナー・家族の意思、医療者間・施設間の連携など」についての苦悩が報告されている。このように、臓器移植医療の現場では、患者やドナー、家族への看護を通して適切な倫理的対応ができずに苦悩している看護職の実態が明らかになっている。一

方、何かおかしいと感じたり、戸惑いを感じたりした場面において、必ずしも倫理的問題であると認識していないこともある。その認識を高めるためには、看護職の倫理的感受性を育むことが重要であると考えられた。

本研究は、RTC や看護師を共同研究者として、日常の看護場面で生じる倫理的問題やその解決策を共に探るようなアクションを起こすことで、RTC や看護師の倫理的問題への気づきが高まり、その対応が変化することを目指すアクションリサーチである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アクションリサーチによって、臓器移植医療での日常の看護場面で生じる倫理的問題に対して、看護師の倫理的実践がどのようなに変化していくのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、現場の看護職（RTC や看護師）が目指したいテーマに焦点を当て、研究者と実践者が協力して研究を進めるミューチュアルアプローチによるアクションリサーチである。アクションリサーチは、以下のように構成した。願いの明確化、実践を語る会【事例検討会】、学習会、である。願いの明確化では、本研究に参加した動機や倫理的実践の困難な事柄について話し合い、アクションリサーチのテーマとしての願いを表明する。実践を語る会では、事例提供者の倫理的実践の語りを通して、研究者と研究参加者が対等な立場で共に考える。学習会では、研究者が看護における倫理的実践に関する知識や情報を提供する。

アクションリサーチを実施するために、臓器移植医療の現場で働いている腎移植・肝移植・肺移植・心臓移植等に関わる RTC や看護師を募集して、研究グループを結成した。

アクションリサーチ開始前とアクションリサーチ終了後にグループインタビューを

実施した。開始前のインタビューは、アクションリサーチのテーマである倫理的実践に向けた参加者の願いを明確にするためであり、終了後のインタビューは、参加者の倫理的実践の変化を導き出すためである。データ分析は、実践を語る会の記録とグループインタビューから得られた質的データを1意味1単位ごとにラベル化し、WordMiner1.5を用いて行った。

【倫理的配慮】

大阪医科大学研究倫理委員会の承認を得た(審査結果番号 看-53(1575))。

参加者には、研究の趣旨および個人情報の保護等について口頭および文書で説明し、同意を得た上で、同意書に署名してもらった。

4. 研究成果

研究参加者は、途中から参加した者を含めて9施設15名が集まった。その内訳は、移植病棟看護師4名、RTC6名、大学教員5名である。研究代表者・連携者である大学教員4名とRTC1名はファシリテーター役を担った。研究実施期間は、平成27年10月～平成28年10月までであり、願いの明確化(1回)、実践を語る会【事例検討会】(7回)、学習会(2回)、アクションリサーチの振り返り(1回)の計11回実施した。1回あたりの実施時間は2時間～2時間半であった。平均出席者数は7.4名(7名～15名/回)であり、2名が11回出席、3名が10回出席した。

(1) 願いの明確化

「臓器移植医療の現場の中で、潜在している倫理的問題に気づく力(倫理的感受性)、その問題に反応する力を向上させ、看護職の倫理的実践力を高めたい」との共通した願いを明確にした。

(2) 学習会

2名のファシリテーターが、それぞれに知識の提供を行った。1回目は「看護実践における倫理的概念と倫理的問題への気づき - Jonsenの4分割表の活用方法」について、2

回目は「臨床倫理検討シートの活用」についてであった。

(3) 実践を語る会

倫理的実践の場で困った事例や、倫理的問題かどうか疑問を感じた事例を取り上げ、7回実施した。それらの事例は、「移植選択に迷いがある患者への対応に関する事例」、「2親等以上の生体ドナーの意思決定支援に関する事例」、「判断力が欠如している成人患者の移植選択に関する事例」、「移植腎機能低下に伴う再透析療法選択に関する事例」、「再移植待機中の長期入院患者とのかかわりに関する事例」などが取り上げられた。アクション前半では、事例を通して感じたこと、考えたこと、思ったことを自由に語り合った。アクション後半では、倫理的実践のためのツール(Jonsenの4分割表および臨床倫理検討シート)を活用して分析を行い、倫理的問題を導き出すまでの過程を語り合った。

(4) アクションリサーチ開始前の願い

アクションリサーチ開始前の参加者の願いについての全ラベル数は27であった。それらの分析結果、5つのカテゴリークラスターが導き出された。クラスターサイズを()内に示す。

カテゴリークラスター1 (9): 倫理的問題を考えるために、異なる見方や幅を広げたい

カテゴリークラスター2 (5): 自分の倫理的判断の良し悪しの振り返り

カテゴリークラスター3 (3): 倫理的問題に気づける力を身につけたい

カテゴリークラスター4 (7): 自分の倫理的な対応を客観視できれば

カテゴリークラスター5 (3): 倫理に関心でいたくない

上記の5つのカテゴリークラスターの成分スコアの布置図を下記に示す(図1)。

布置図は、カテゴリークラスターの位置関

係を示すものであり、意味が近いかどうかを表す。カテゴリークラスタ-1、3、5は離れているが、2と4は近い位置関係にあるので意味が近いことを表している。

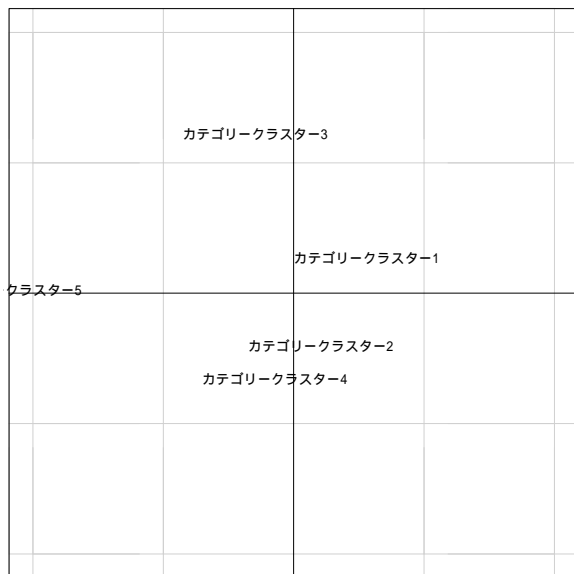


図1 カテゴリークラスタ成分スコアの布置図 (アクションリサーチ開始前の願い)

(5) アクションリサーチ終了後の振り返り

アクションリサーチ終了後に振り返った倫理的実践についての全ラベル数は70であった。それらの分析結果、8つのカテゴリークラスタが導き出された。クラスタサイズを()内に示す。

カテゴリークラスタ-1 (8) : 患者や家族の情報を共有することによる知識や視野の広がり

カテゴリークラスタ-2 (11) : 倫理的実践を導くツールを活用することの効果の実感 (情報収集の大切さと患者理解の深まり)

カテゴリークラスタ-3 (4) : 共に考えることによる意識の強化

カテゴリークラスタ-4 (8) : 思考することへのわくわく感と自信の深まり

カテゴリークラスタ-5 (6) : 他者から得た知識の活用

カテゴリークラスタ-6 (29) : 悩みながら考えることや他者との交流を通し

て見えてくる気づき

カテゴリークラスタ-7 (2) : 真意を探るための入念な情報把握

カテゴリークラスタ-8 (2) : 現場に生じている倫理的な問題が何かを考えることの習慣化

上記の8つのカテゴリークラスタの成分スコアの布置図を下記に示す(図2)。

カテゴリークラスタ-8は遠くに離れており、1と7が近い位置にあり、2と3と5が接近しており、4と6が接近して近くに位置している。

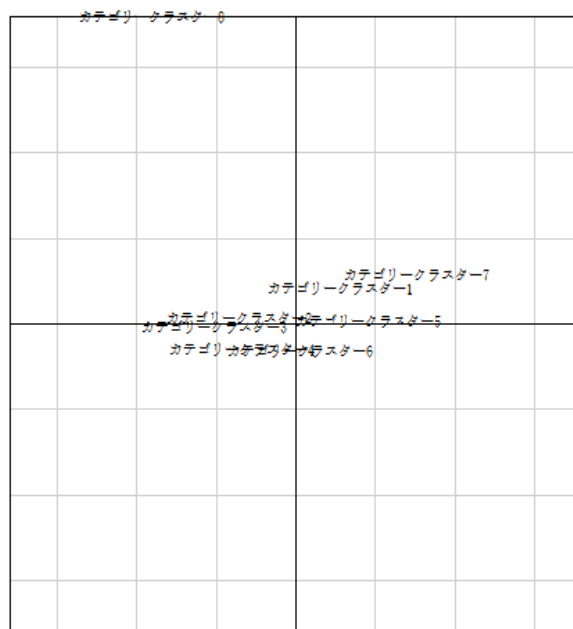


図2 カテゴリークラスタ成分スコアの布置図 (アクションリサーチ終了後の倫理的実践の語り)

(6) 実践を語る会での語り

7回の実践を語る会で参加者が語った倫理的実践について分析した結果、8つのカテゴリークラスタが導き出された。全ラベル数は67であった。クラスタサイズを()内に示す。

カテゴリークラスタ-1 (33) : レシピエント・ドナー・家族が互いに相手の状況を計り知り、合意形成できた上での自発的意思決定

カテゴリークラスタ-2 (2) : 臨床心理士との情報共有ができる環境

カテゴリークラスター3 (11) : レシピエントとドナーその人に見合った移植後の生活に対する予期的判断と目標設定の共有

カテゴリークラスター4 (11) : 術前の移植の適応判断の一つである自己管理能力の見極めと移植後の長期的継続的な関わり

カテゴリークラスター5 (4) : その人の人生を理解するための傾聴とその人にとって必要十分な情報提供

カテゴリークラスター6 (2) : ドナーの本心や患者との関係性を見極めるための対面による面談

カテゴリークラスター7 (2) : 看護師としての職業倫理がもたらす感情抑制の苦痛の自覚

カテゴリークラスター8 (2) : 信頼できる相手の存在が決め手

上記の8つのカテゴリークラスターの成分スコアの布置図を下記に示す(図3)。

カテゴリークラスター4と5と6と7は離れた位置にあるが、1と2と3と8は接近して近くに位置している。

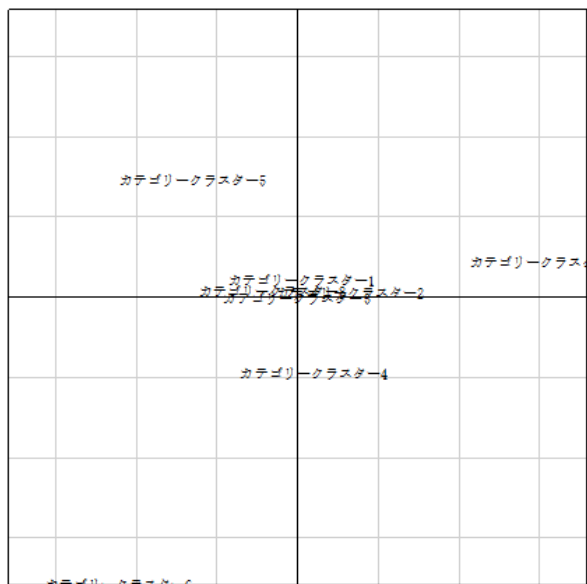


図3 カテゴリークラスター成分スコアの布置図(実践を語る会での語り)

アクションリサーチによって、参加者は自

己実践を見つめ直すきっかけになり、倫理的実践に対する認知や行動に変化が見られた。また、院内院外問わず、移植に携わる RTC や看護師、さらには他職種との協同的かつ多角的な視点がより良い倫理的実践につながる事が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

萩原邦子、今西誠子、習田明裕、赤澤千春、谷水名美、林優子、腎移植看護が直面する倫理的場面とその対応(総説) 日本臨床腎移植学会誌、査読無、2017(印刷中)

[学会発表](計1件)

谷水名美、林優子、赤澤千春、萩原邦子、今西誠子、習田明裕、臓器移植看護における看護師の倫理的実践の変化 - アクションリサーチを用いて -、第13回日本移植・再生医療看護学会学術集会、査読有、2017.11、広島(発表予定)

6. 研究組織

(1)研究代表者

林 優子 (HAYASHI Yuko)
大阪医科大学・看護学部・教授
研究者番号: 50284120

(2)連携研究者

赤澤 千春 (AKAZAWA Chiharu)
大阪医科大学・看護学部・教授
研究者番号: 70324689

習田 明裕 (SHUDA Akihiro)
首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号: 60315760

今西誠子 (IMANISHI Tomoko)
京都学園大学・健康医療学部・准教授
研究者番号: 50321055

(3)研究協力者

萩原邦子 (HAGIWARA Kuniko)
大阪大学医学部附属病院・看護部